

2019
福島県現代詩集

福島県現代詩人会

菊地清寿

不可視な世界 — 繭 —

一匹の蚕

回転族を這い上がり

君に向かつて静かに首を振る

— ほのかに風が吹き渡る

飴色に透けてくる

繭籠りの前ぶれ

茶色い口元

糸を放つ

— 待ってしよう、この場所にて

井形の向こう側

事故を起こした赤いバスが

スーと通って行った

絹糸を取るために繭を茹でる

ネジの回転音

背筋を寒くして様子を見つめる

繭の中でジ—と待った

あなたからの手紙は

終に届かなかったので

僕らは黄色いバスに乗り換え

見知らぬ不可視な世界へ避難した

野の道を夢に向かつて往くうちに

黄色いバスは飴色に変わり

透明に近くなつた

高いエンジン音

激しい振動

最前列から最後部まで

— 時が経つても

— 季節が移つても

— 時代が代つても

— 浮遊する蝶のような非在である物体

課された義務のよろのろ歩き

錆びて読めないバス停留所

もう少しで着く

分っているよね

— 君の声だ

うん

— 僕の声だ

一本の繭糸が切られる日

まぢかに迫る

— 古から生き延びた物質たちの蠢き

繭のような不可視な世界に堕ちる

廣川秋男

冬

冬にも心がある

多数の人は冬に降り積もる雪になる

その下で育てる

樹木の土の中の根の強靱なことよ

僕の心にもひっそりと

冬が来て降る雪がある

ある朝誰かが僕の雪を踏んで

道を付けて通ってゆく

凍てついた晴天の日

踏まれた雪は堅い道になる

冬の雑草の心を知っている

大地に浸みる雪水の

冬の豊かさを知っている

雪になる人々を知っている

人々は冬の心を知っている

風

歩いていると風が分かる

何を言いたいのか

まつわりついているつむじ風

黙っていると風が分かる

何を追ってきたのか

通り過ぎるとき春疾風

風の気持ち分かる

たちどまっていると風が分かる

何を怒っているのか

砂塵を巻き上げて北風

風の姿が見える

風はびゅーびゅーと

地球の喉を膨らませ

地球の悲喜もごもを

吹きあげている

渡辺孝行

老練

ハイヨーっ、シルバーっ！

七十まで働けるのはいいことだが
義務化というハナシではないだろうっ
とテレビニュースに一齣入れると
救急車の警笛が目ざましのように駆けつける

高齢化うなぎ昇りの団地の早朝

先日贈られてきた詩集をひらいて

「命」の詩行をたどり

わが認識史をなぞったのその終段に

人間の虚構の能力の

人間に新しい希望をもたらすことが

つづられているのに

こころうたれ 目がさめた

なるほど希望とは虚構でしかないこと

しらぬことではなかったのに

ないことをなげいてばかりいる

と すこし笑ってじぶんにかえった

きょうもほぼボランティアな老働の

希望とは別次元の

締切地獄へと出動するまえの

束の間 詩の息を吸い込んで

救急車はどこにいったのだろう

曇天の下の千余の家々の静寂を

カラスの羽ばたきが戦がせる

おお今朝は一般ゴミの初収集日

ハイヨーっ、シルバーっ！

※竹林征人詩集『海獣』Vol.5所収

岩田武昭

議事録詩人

職場のミーティングで
ホワイトボードにコメントを書いていた

ストーリーとメッセージを

コンパクトにまとめて

人を動かすもの

これって詩だと思った

詩のウイルスは

こうして生き延びていた

心が乾燥したオフィスで

詩に感染するんだな

キラキラネーム

家では子どもにキラキラネームをつけて
人と違った個性になって欲しいと
プレッシャーをかける

学校では子どもものの個性に注文をつけて
人と違ったことをしないで欲しいと
プレッシャーをかける

キラキラネームに折り目がついて
キラキラしていく

片岡真琴

貧血の左腕

除毛した左腕にハサミの刃を強く押し当てても
あまり（というか）
ほとんどまったく（というか）
全然切れません

ハサミの場合は

かなり強く押し当てたうえで
そのまま強く引き切らないと切れません
つまり腕を切るなら
包丁かカッターの方が適しているわけです

しかしながらカッターでついた傷痕というのは
情緒的な余韻に欠けるし
包丁ではあまりに情緒的になりすぎるし
だからハサミがちょうどいいのでしょう
（フロイトだってそういつているんだから？）

ち
血が
ぶ

ぶぶ、ぶぶぶ、ぶぶぶぶぶ
ぽおおおおおおおおおおおおお

つと手首の表面に膨らんで
するるるる

つと江り腕を伝い肘に溜る

痛み、しびれ、貧血、そして冷えた腕、気持ちいい
（でも温かいから気持ち悪いんだよ）

だから肘に生理用ナプキンを当てておくのです
なにせ血を吸うことに関しては

生理用ナプキンの右に出るものはないのですから

排泄は詩

でもリストカットは詩じゃない

そしていずれでもない月経

生きたい

死にたい

大山いづみ

「命の音」

震災から七年　なかなか足が向かなかつた

やつとでかけたのは昨年だつた

仲間と一緒に富岡　大熊　双葉　帰還困難区域

そして浪江町の請戸地区へと

足を踏み入れた

請戸地区には魂の音が鳴る

ポケットには数珠が入っている

虫が鳴くには早すぎるチツチツチツ

どんどん集まる音　チチチチチツ

もしやと思ひ数珠を出す

一斉に鳴り出す音の数々

請戸地区には命の音が鳴る

原発事故で誰も入れなくなつた場所

あの日の津波に飲まれ助けを求めた魂

地鳴りの叫びに消されたか

この世の終わりに思つただらうか

嘆きの声は波に盗まれたか

請戸地区には命の音が鳴る

大きな揺れは

大地を破り

海を押し潰した

行き場のない海水は津波となつて

陸を削つた

追いうちをかけたのは

原発だ

安全だとされていたはずの

原発は助かつたはずの命さえ

むしり取つた

私は知っていた　いや感じていたのだ

今だ嘆き悲しむ人達がいることを

だからこそ来れなかつた

だからこそ来たかつた　この矛盾

数珠は持つて来ていた

祈りを捧げに来た

祈るごとに消えていく音

そして集まってくる音に祈りを捧ぐ

迷ふことなく成仏をと願ひながら

請戸地区を後にした

青天目起江

あなたとわたし

格段に今日の山の端は朱く燃えています

灯台からは水面に散りばめられた

真昼の星屑が見えています

盛夏の神社のみみじは

意気揚々とした少年のように揺れています

日の光、風が

わたしとあなたの間をまたいで行きます

感じています、あなたはわたしの眼を通して

たぐさんのものを見たがっている

ただ、わたしは

ぬくもりを越えてここを踏みしめている

左手に喪ったもの、右手に得るものを持って